
東方炎貝時 ~ The shellfish of the sky.

リョク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方炎貝時 The shellfish of the sky.

【Nコード】

N8635Y

【作者名】

リヨク

【あらすじ】

未来での戦いも終わり過去に戻る事となった沢田綱吉。
だが着いた場所は幻想郷！？

幻想入り来る！

ようやく……………終わるんだ！！
過去に帰れるんだ！！！

俺、沢田綱吉はそう思っていた……………。
本当に……………あんな事になるなんて……………これっぽっちも思っ
ていなかったんだ。

「……………ここ何処ー！！？」

現れた場所は何の変哲も無い異常に長いだけのただの階段。
しかも現れた場所が悪かったのか足を踏み外しそのまま下まで転が
り落ちた。

「いってーッ！！！！？」

これは流石に痛い、うん痛いッ！！
見てるだけで痛くなってくる！！

「いってー！！すげー痛い！！！」

体中に激痛が走る。そしてすぐに収まり、上を、階段を見上げた。
沢田綱吉、通称ツナは階段を見てた。

「長ッ！！！」

ここでも突っ込みを入れる、つまりそれだけ長いと言うことだ。

「・・・・・・・・登った方が良いかな？」

ツナの持つ技能『超直感』がこの階段を登った方が良いとつづけていた。仕方なく『超直感』に従い、そのまま登る事となった。

それから三時間後・・・・・・・・

「・・・・・・・・いつになったら着くんだよ」

・・・・・・・・さすがに歩き疲れたのか、少しやさぐれてきている。

すでに明るかった空は暗くなり、星が出ていた。
その星空はとても美しく、都会じゃあまず見られないほど神秘的だった。

「・・・・・・・・綺麗だ・・・・・・・・」

ツナは無意識の内に呟いていた。いきなり一人でこの世界に投げ出され、仲間もおらず、心細かった筈だがその美しさに見とれていたのだ。

・・・グルルッ！

いきなり響いた獣の唸り声・・・。。。

ツナは唸り声を聞くと服の内側から手袋と薬を取り出した、若干震えていたが・・・。。。。。

階段の両幅は深い森になっている、これではさっき迄の美しかった夜空は今では不気味にしか感じないだろう。

右の森ががさがさと音を立てて揺れる・・・。。。。。

ツナの体に緊張が走る。

そして森から獣が現れた。

獣の正体は熊だった。

「なっ！！？」

ツナは声をあげた。

ツナが声をあげたのと同時に熊は走り出し、ツナを体当たりでブッ飛ばした。

ツナはそのままブッ飛ばされ木に当たる、その木は簡単にへし折れ、砂煙をあげる。

普段のツナならこんな事にはならない。

すぐさま逃げ出すだろう。

だがツナは逃げなかった、正確には動揺して隙を作りそこをつけこまれ、攻撃されたのだ。

何故動揺したか？

それは熊の目が三つあったからだ！

それだけでなく体も普通の熊に比べて三倍の大きさ、毛並みも赤く綺麗に生え揃った歯は明らかに血がベツトリと塗られていた。

熊は本当にただの熊ではなかったのだ。

そして熊はぶつ飛ばした人間に喰おうとトドメをさしに煙が舞い上がって場所に向かった。

だが彼も普通の人間ではない。

煙が上がっている場所に淡く光る橙色の炎が突如表れた。
そして炎を纏った拳がいと簡単に熊を殴り飛ばした。

「……………」

煙から出てきたのは額に炎を燈した沢田綱吉だった。

ハイパー死ぬ気モード

『超死ぬ気化』自らの潜在能力、リミッターを外し内面的感覚である超直感等の感覚を上げ生命エネルギーである死ぬ気の炎を放出する状態……………」

ドーピングみたいなものではあるがあくまでも自身が鍛えてこそ意味があるものだ。

「……………普通に倒すつもりだったんだが……………」

ツナは目の前の熊を見据えた。

熊はまだピンピンとしていた、だが先ほどまでの捕食者としての顔は無い……………今は戦う顔だった。

二つの足で立ち、鋭利な爪を伸ばし紫色の光を纏わせていた。

「死ぬ気の炎じゃない？」

「ガアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

熊はツナに襲い掛かる！！

だがツナはそれを右手のグローブで防ぎ熊の腹に拳を決めた。

熊は血を吐きそのまま上にぶっ飛ばした。

熊は綺麗な曲線を描き、森まで飛ばされた。

「……………なんだったんだ？今の力は……………」

ツナは少しだけ右手を庇いながら呟いた。

熊との戦いでツナは右手で防いだがその衝撃で右腕がいかれたのだ。単純に防いだように見えたが完全に守れたのはイクスグローブだけでその衝撃は完全に響いていたのだ。

ツナは上を見て……………

「……………このままだったら空を飛んだほうが早いな」

そう呟いた。

炎の推進力で空を飛んだが右手がまだ治っていないかった為変な方に飛んだりしたが何とか上にたどり着く事が出来た。

「……………疲れたッ！！！」

ツナはハイパー死ぬ気モード超死ぬ気化を解き息を吐いた。

右手は少しだが動いていた、治り始めてきているのだろう。
そしてツナは目の前にある建物を見た。

それは……………

「神社？」

それは神社だった、だが小さかった。
あくまで神社としての広さで住居としては申し分が無かった。

「……………神社だから取り合えずお金を……………」

誰もがする行動をする。

「……………三百円しかない……………」

なけなしの三百円、過去のツナの世界ならまだしも未来で得たなけなしの三百円……………
それを賽銭箱に入れる。

「トッー」

明らかに何も入っていない空っぽの音が響いた。

「……………」

流石のツナも何も言わなくなってしまった。
ツナは取り合えず座ろうとしたが……………。

たたたたたたた……

「お賽銭……………!!」

神社から出てきたのは白い着物を着た少女だった。
明らかに今寝ようとしていたと言っ感じだった。

少女は啞然としているツナを無視し、賽銭箱を見た。

「三百円入ってる……………」

少しだけ嬉しそうに賽銭箱から三百円を取る。

「……………ありがとう」

少女はそう言っと、頭を下げる。

「……………あ、うん……………どういたしまして」

ツナも頭を下げる……………。

「えっと、ここ何処なんですか？」

ツナは早く元の並森に戻りたいがために少女に聞く。

「外来人……………」

少女はそう呟いた。

「へ？今何て」

「まあ良いわ、中に入りなさい……………話はそこで聞くから」

そう言つて少女はツナを神社に招きいれた。

「人と妖怪が住まう地——！！？」

「うるさいわよ——！」

「ごめんなさい……………」

少女、博麗霊夢は頭を抱えていた。
それはツナが原因である。

「普通の神隠しならまだしも時間旅行中にここに流れ着くって……
……私の力で返す事出来ないじゃない!!」

「……………ごめんなさい」

この二人は互いの事を話した。

霊夢は幻想郷、神隠し、妖怪の事を、ツナは十年バズーカで未来に行き戦った事を……………。

ツナはだいぶ省略しているが……………話せるところまでなら話した。

「まあ良いわ、暫く泊まりなさい」

「え？良いの!!?」

ツナは霊夢の言葉を聞いた。

「まあアンタからはお賽銭貰ってるしそれくらいはしないとね」

こうして、ボンゴレ十代目沢田綱吉の幻想入りが始まった。

死ぬ気の炎

空をかけるのは巨大な龍……………

「で、でかー！！！！？」

それに反応する一人の人間……………
龍は吼える、それだけで大気が軋むほど……………
そして龍には一本の剣が刺さっていた。

「……………夢か……………」

ツナは目を覚ました、寝ていた場所は少し狭いだけの和室だった。

「なんだっ たんだ？あの夢……………」

ツナは取り合えず布団から起き、顔を洗う為に部屋から出た。
そのまま外にある井戸に向かう。

「うゝ、さむ……………」

外の気温は寒く、枯葉が目立っていた。

すでに11月………寒いのはしょうがないはずだ、しかもここには暖房などの器具が無いのだ。

ツナは井戸水を汲み、そのまま手で掬う………。
そして顔につけた。

「……………つめたッ!!」

井戸水は冷たくツナの肌を刺す。
その冷たさに耐えながら顔を洗い、タオルで顔を拭く。

「おはよー」

ツナが顔を洗い終わったと同時に霊夢が襖を開け現れた。
そして白い着物が少しだけ肌蹴っていた………初心なツナはそれに顔を真赤にする。

「ちょ!服肌蹴てる!!!!」

「私も顔洗うからどいて」

ツナの説得も通じず霊夢がツナを押しつけて井戸水に手を突っ込んだ。

「……………つめたッ!!」

これまた同じ反応をした。

「もぐもぐ」

「むぐむぐ」

霊夢とツナは朝食の焼き魚を食べていた。
だがツナは顔を真赤にしていた。

今の霊夢の姿は赤と白の脇が無い巫女服とセーラー服を混ぜ合わせたかの様な物だった。
それにツナは会った時は夜で暗かった為顔を良く見ていなかったのだ。

霊夢の容姿はかなりの美少女だ、それを見て顔を真赤にするツナは悪くない。

そして二人は食べ終わり、少しだけ時間が過ぎた。

「じゃあ行くわよ」

唐突に霊夢が言った。

「何処に行くんだよ……………」

「香霖堂よ、色々な物が売ってるわ」

その後に「服も買わないといけないだろうしね」と付け加えた。
その言葉にツナも納得した。

「じゃあ行くわよ」

霊夢は空を飛んだ……………。

「何で空飛べるの！！！？」

「あ、そっぴゃアンタ外来人だったわね」

霊夢はそう言っただけで戻ってきた。

「いや、空は飛べるんだけど……………」

「なら早くしなさい」

「わ、分かったよ」

そう言っただけで手袋を着け、死ぬ気丸を飲む。
額から炎を出し、オレンジ色の瞳になる。

「行くぞ」

「何で性格が変わるのよ！」

明らかに性格が変わったようなツナに霊夢も驚愕する…………。

「まあ良いわ…………じゃあ行くわよ」

そう言って二人は博麗神社から飛び去る。

ツナは死ぬ気の炎を消し、目の前にある店を見た。

「ここが香霖堂よ」

「…………こんな所に人が来るの？」

「めったに来ないわよ」

香霖堂は魔法の森の中にあるため滅多に人間の客は来ない。妖怪ですらあんまり来ないのだ。

「居るー？霖之助さん」

霊夢は扉を開け、店の中に入る。
中には白い髪をした眼鏡の美青年が居た。

「……………ああ、霊夢か……………」

青年は霊夢を見ると返事をした。

「後ろの君は？」

「あ、俺……………いや僕は沢田綱吉です」

「別に良いよ、僕は森近霖之助だよ、よろしくね綱吉君」

「こ、こちらこそお願いします！」

ツナは霖之助と握手をした。

そして霖之助は霊夢の方を向き直した。

「で、今日は何の用だい？」

「ツナに合う服が欲しいわ、それと……………」

そう言つて霊夢は服からある物を取り出した。

それは鎖に通された壊れた指輪だった。

「それは！」

ツナが驚愕した、何時の間に取られたのかと……………。

「アンタが寝た時に取つたのよ、壊れたままじゃ駄目だと思つたか

ら」

「……………ありがとう」

ツナは霊夢に感謝した。

それは未来での戦いで命を落しかけたのを救ったリングだからだ。
素直に感謝された霊夢は顔を少し赤くした。

「……………別に」

霖之助も素直に驚いていた、あの鉄面皮である霊夢が顔を赤くした
と言う事実いだ。

「（へえ、霊夢が顔を赤くするなんて……………）」

霖之助はそれに少しだけ嬉しそうだった。

霊夢が周りからどんな扱いをされているかを知っているからだ。

「じゃあこの指輪を直せばいいんだね」

そう言って霊夢から指輪を受け取る。

「……………この指輪は……………」

霖之助はそれを持った瞬間少し考え、ある部屋に立てこもった。

「すぐ終るから、本でも読んで待つてるといいわ」

そう言って霊夢はすぐ近くにある本棚に手を伸ばし本をとった。
ツナも本を取った。

「あ、これ最新刊だ！」

ツナは漫画を夢中で読み始めた。

1時間近く二人は読んでいた。

「……………終ったよ」

霖之助は部屋から出てきた。
持ってる指輪は完全に修復されていた。

「完璧に直ってる！！」

「ああ、ちゃんと直したからね」

そう言つて、霖之助はリングをツナに渡す。
それを返してもらったツナはそのリングを霊夢に渡した。

「……………何のつもり？」

「えっと、家に泊めさせてくれたから……………その御礼で」

「……………まあいいわ、貰っておくわ」

そのリングを指に通す霊夢……………。

「じゃあね、霖之助さん」

「え！？お金必要じゃないの！？」

「いや、いいんだよ…………あの指輪を見たからね」

そう言つて、霊夢とツナは香霖堂から去つていった。

その後姿を見ていた霖之助は…………、

「…………君なら、霊夢を変えられるかもしれない……………」

そう呟いた。

「…………さてと、」

霖之助は店の中に入りある部屋に行く…………。

「…………作ってみようか」

その部屋には橙、赤、青、藍、黄、紫、緑の石があった。

「……………それでさっきの力は何？」

博麗神社に帰ってきた霊夢とツナ。

霊夢は早速ツナに死ぬ気の炎の事を聞こうとした。

「……………今言わなくても……………」

「今言いなさい」

訂正、聞き出していた。

そしてツナは話せるだけ話した。

「へえ、生命エネルギーを炎にして放出するね」

それを聞いて霊夢はツナに手を差し出した。

「取り合えずその薬くらい渡しなさい」

「なんでー！！？」

「便利じゃない、それ」

「いや危険だよー！」

「いいから渡しなさいー！」

この後3時間に渡るいい争いの結果、5つの死ぬ気丸は霊夢の手に渡った。

人里

博麗神社に七色の光が輝いた。

その光が収まると空に浮いている霊夢が居た。

「こんな感じよ」

「無理だつて!!」

二人がやっているのは単純な霊力の運用法の練習だ。

「まあアレはまだアンタには早いからこれ位で良いわ」

そう言つて人差し指に薄い青色の弾を作った。

「それと空飛ぶ練習もしておきなさいね」

「ちょ、待つ!!」

そう言つて霊夢は神社の中に戻つていった。

俺は結局自由な霊夢を止める事は出来なかった。

「全く……………」

文句を言いながらもしっかりと取り組む。

「イメージが大事……………」

霊力の使用はイメージが重要、霊夢曰く『自分の体の中にある栓を外す感じよ、それさえ出来れば後は勝手につかえるわ』だ。山本や獄寺君よりは分かり易い説明の仕方だけど……………。

「栓……………栓……………コレかな？」

イメージの中で何か説明は出来ないけど体の中にある栓みたいなものがあるのが分かった。
それを外すと……………。

「うわッ!!」

体がいきなり熱くなる……………ッ!!
何かが満ちていく感じがする、これが霊力……………。

「……………手に集める……………イメージ」

右手の人差し指に集中し集めて……………作る。

「……………出来た」

息を吐く、そして吸う。

一気に来た疲労を少しだけ休める……………そしてそれを放つ
それは一直線に進み木に当たる、木の表面が爆発し霧散する。
!

「……………霊夢がやったようにはいかないな」

霊夢が先ほど撃った霊力の技、夢想封印をやった場所は更地に変わっていた。

「次は……空を飛ぶ方法か……」

イクスグロブのように霊力を噴射する、これはいとも簡単に出てきた。

恐らくだが次も簡単に出来るだろう。

「後は」

目を開けると一番最初に霊夢の顔が入った。

「……………おはよう」

「おはようじゃ無いわ、アンタ何したのよ」

そう言っただけで霊夢は俺の目を見て外を指差した。
霊夢が指差した場所は小さいながらもクレーターが七つ程出来ていた。

「少し新技を……………」

「どんな技なのよ！」

霊夢が少し怒鳴った、少し怖かったけど・・・

「・・・いや、失敗したから技じゃないよ、多分出来ないと思う」

流石にあれば自信が無い、イクス・バーナーと違って完成できるといった感じがしない。

流石に霊力覚えたての俺が使えるようなら苦労はしないよ・・・。

俺には才能が無いから、駄目ツナだから・・・。

「・・・まあ良いわ、出かけるわよ」

霊夢は唐突にものを言う、リボーンにみたいだ。

だけどリボーンとは違う、リボーンは無茶苦茶だし、遊び感覚で無理難題な事を言ってくる。

だけど俺を信じてくれている。

霊夢は素っ気ない態度だけど優しい。

基本的な事も教えてくれた。

ただ霊夢は何故か知らないけど恐れている。

そして今、その無意識的な恐怖が表れている。

超直感をもつてなきゃ分からない位小さかったけど・・・。それが一番表れている。

「・・・何処に？」

霊夢が恐れるような場所・・・。

「人里よ」

その時、霊夢の肩が少しだけ震えていたように見えた。

「少し古くさいな」

それが人里の第一印象だった。

明治時代のような町並みで夜が近付いていた為か人は少なかった。そしてそれ以上に嫌な感じがする。

「そうね、外の世界の人もそう言うわ」

霊夢は俺が言った言葉にそう付け加える。

「ごめん、気を悪くした？」

「ううん、別に」

霊夢は何も関心を持たなかった、ただ少しでもここから立ち去りたいとそういう感じだった。

「……………で、何をすれば良いの？」

「買物よ」

そう言って霊夢は服の中から袋を取り出した。

「そろそろ食料がきれそうだったからね」

そう言うと霊夢は近くの店に行きお金を出し、そのまま物を持ち去った。

「良いの！アレで！！」

「……………いいのよ」

……………霊夢の声が少しだけ震えていた。

それに嫌な視線を感じる、後ろから……………そう思いながら後ろを見た。

「……………」

ああ、なるほど……………。

そういうわけか……………。

「霊夢、先帰って良いよ……………俺が買ってから」

「……………別に良いわよ」

「いや、俺にやらせて」

そう言って霊夢を帰らせようとする、ようやく霊夢が安心したように見えた。

「……………取り合えず買って帰ろう」

ここにはあまり居たくない。

ツナ晩御飯を食べ終わり外に出ていた。
やる事は唯一つ、霊力を使った修行だ。

といっても簡単な事しか出来ない、指先に集めて放つ、空を飛びながら弾幕を張る。

その繰り返しだった。ツナは霊夢がやった事を真似しているだけに過ぎない。

「……………何で先に私を帰させたの？」

霊夢が外に出てきてそんな事を言った。

「……………霊夢ってさ、人里の人達に恐れられてるよね」

「……………どうしてそう断言するのよ」

霊夢がツナを変な物を見るような目で見ていた。

「他の人達は霊夢を化物を見るような目だったから」

あの時の霊夢を見る目は完全に同じ人間を見る目じゃなかった。

「そりゃそうに決まってるじゃない、人と妖怪、どちらの立場にもなる、場合によっては人を裁く事にもなるからね」

「そうだね」

ツナもそれを肯定する。

「そして霊夢は人を恐れている・・・」

ツナがそう言った瞬間、周囲の空気が変わった。

「誰が恐れてるって？」

発生源は霊夢だった、明らかにその声は酷く恐ろしく、そして恐怖があった。

「霊夢だよ」

それを簡単に言うツナ、その声にはいつものおどおどとした感じはなく、見透かしているような印象があった。

普段の駄目ツナの方しか知らない人間は間違いなくツナとは思わないだろう。

「ふざけんじゃないわよ、私がいつ恐れているっていうの？」

「ずっとだよ」

ツナは霊夢に対してそう言う。

「・・・・・・・・アンタ何者よ」

「非日常に巻き込まれた駄目人間だよ」

霊夢の質問にツナはそう答えた。

「・・・・・・・・アンタは私が怖くないの？」

霊夢の本心の言葉が出て来た、唇は震え、声も震えていた。その質問にツナはちゃんと答える。

「怖くないよ、何度も怖い思いをしてきたから」

ツナはそう答えた、その目には恐怖など写ってなかった。

魔法使い

「……………」

「…………… 八八八」

ツナと霊夢、二人は見詰め合っている。
正確には霊夢はがツナを涙目で睨み付けており、ツナがそれに苦笑
いをしていた。

「お願い！！もう一回だけ！！もう一回だけで良いから！！」

「……………でもこれで三十回目なんだけど……………」

二人がやっているのは将棋だ。

ただ将棋版が無い為、平らな岩に筆で描き手ごろな石を見つけてそ
れに字を書いて即席の将棋になっているのだ。

ただ霊夢は一回もツナに勝てていないのだ。

毎回毎回即効で片付けられる、ツナも少し手加減したりしているの
だが毎回勝ってしまう。

そしてツナはわざと負けようとするが勘が鋭い霊夢は「本気でやり
なさい！！」と言うので結局勝ってしまう。

霊夢も勘は鋭いがツナの場合はその二段上に行く超直感、はなか
ら勝負などなりはしない。

「……そろそろお昼だから片付けて食べない？」

ツナが神社の中にある古臭い時計を見ながら霊夢にそう言った。

「……分かったわよ」

そう言って霊夢は神社の中に入り料理を作る。

「……さてとっ」

ツナは右手に霊力を集め指先に集中、そして拳銃のように放つ。それは木を貫通し30メートルくらいのところで爆発した。

「凄い威力になったな……」

力の使い方が分かってきたのか嬉しそうなツナ、そして神社から出てきた霊夢が「何事ッ!？」と言ってる。

この後ツナは霊夢を鎮めるのに苦労したのは言つまでも無い。

「アンタさあ、自分がどれくらいの力持ってるか知らないの？」

霊夢が昼食をほおばりながらツナにそう言う。

「……………いや、俺は駄目ツナだから……………あんなのは誰だって」

「出来ないわよ！！それにアンタが駄目だったら人里の人間はどうなるのよ！！ゴミしか残ってないじゃない！！」

ツナの駄目宣言に霊夢が反論する。

「え、アレくらい誰でも」

「私はともかく普通は出来ないわ、霊力の素養とかもあるし。私には少しだけ劣るけど保有霊力なんて馬鹿げてるし……………」

馬鹿げてる、霊夢はそう言った。

ツナにとっては信じられなかった、自分に才能があります、なんて誰も信じられないだろう。

「まあ死に掛けたりすれば結構上がるけど、最初の保有霊力量も調べてみたらかなりあったわよ」

「……………死ぬ気弾が原因か……………」

ツナは少し項垂れる……………。

「まあアンタには元から才能があったんだから良いじゃない、駄目じゃないわ」

「……………ありがとう」

「どういたしまして、じゃあ昼食食べ終わったら幻想郷のルールを教えてあげるわ」

霊夢はそう言いい、お茶を口に含んだ直後、神社の外から轟音が響いた。

そのせいで霊夢は口に含んでいたお茶を全てツナの顔にかけた。

「なに!!?」

「あつっー!!!!」

霊夢は外に飛び出した。

「よお 霊夢」

そこに居たのは白黒の服を着た霊夢より小さい少女が居た。

「魔理沙じゃない、何のよう?」

霊夢は少女、魔理沙にそう言う。

「博麗神社に居候している外来人を見に来たんだぜ」

「そういう事」

「…………… 霊夢、何があつたの?」

ツナは手ぬぐいで顔を拭きながら神社から現れた。

「へえ、お前が外人か」

魔理沙はツナをジロジロと見た。

「なんかヒョロっちな、後駄目っぽい」

「初対面で酷い事言われた!!」

ツナは魔理沙に言われた事をつつこんだ。

魔理沙はツナにつつこまれたことに驚き……………、

「…………よし、つつこみだぜ!!」

「何が!!!!?」

「いや、最近面白い奴居なくてさあ、ようやく面白い奴見つける
ことが出来たぜ!!」

魔理沙は退屈のようであった。

「ハハハ…………あ、君名前は？俺は沢田綱吉」

「霧雨魔理沙だぜ」

二人は互いに自己紹介をし、魔理沙は霊夢を見た。

「じゃあ久々にやるぜ、弾幕ごっこ」

「そうね、ツナ、そこら辺に居なさい」

霊夢はそう言ってツナを安全な場所に座らせる。

「じゃあ見てなさい、これが幻想郷のルールよ」

「綺麗だ」

ツナが呟いた、まさにその一言だった。

相手を殺さない程度の力、そして特殊なルール、それを決める為の争い。

ツナにとっては憧れだった。

「霊符「夢想封印」！」

霊夢の一撃が魔理沙に当たる。
これで決着。

「また負けちまったぜ」

魔理沙は悔しそうにそう言った。

「まあ負けないように戦ったからね」

霊夢もそう言う。

「で、分かった？」

「うん」

霊夢はツナのスペルカードを作っていた。
魔理沙の勝負でツナもスペルカードを作りたい、そう言ったので作っていた。

「アンタの場合は死ぬ気の炎があるから大丈夫だろうけど……」

「大丈夫、やってみせるから」

ツナは一枚のカードに炎を込める。
そのカードにはこう書かれていた。

超炎「イクスバーナー」

「……………まだ時間がかかるかな？」

暗い場所、そこで喋っているのはたった一人。

「君とは決着をつけないとね、綱吉君」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8635y/>

東方炎貝時 ~ The shellfish of the sky.

2011年11月29日21時47分発行